

「日仏関係の帝国史—産・官・学のアクターからみる」

岡田 友和（人文学研究科外国学専攻）

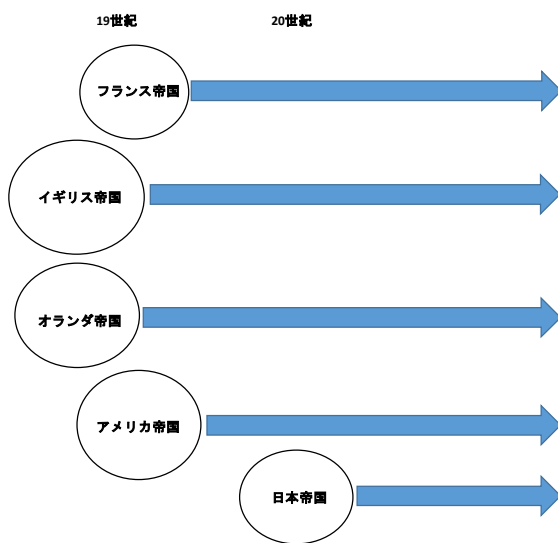
<本日の講義内容>

- 0. 多様な Empires、絡み合う Empires
- 1. 帝国と人種・国籍
- 2. 国際的地位をめぐる駆け引き
- 3. 1920年代フランスの日本帝国観

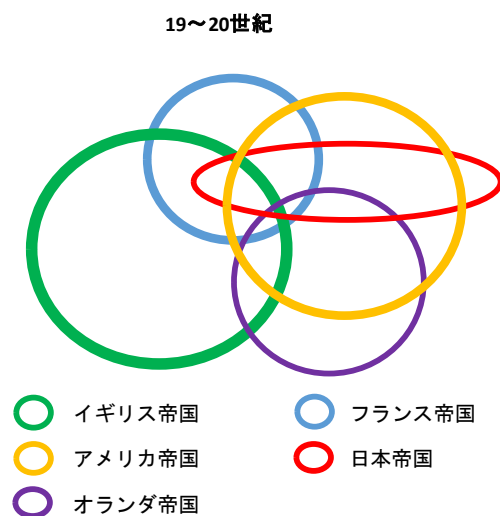
0. 多様な Empires、絡み合う Empires

- 日・仏帝国の「形成、協力、妥協、競争」／「周囲の顔色を伺う」帝国 [岡田 2020]
- 拡大・交差する世界市場 (1858-1906) [権上 1982] ; [篠永 2008]
- 国際秩序と国際的地位 (1907-1939) [松沼 2012, 2017] ; [和田・他 2012]
- インドシナをめぐる日・仏帝国主義 (1940-1945) [Namba 2012]

【図1】 単線的・個別の帝国史研究



【図2】 混合的・複数の帝国史研究



1. 帝国と人種・国籍

- フランスの「人種」観
- ハノイの娼婦: 「植民者のイメージを曇らせるタブー」 [Tracol-Huynh 2009]
- 変容する日本「人種」: アジア系外国人からヨーロッパ人と同じ地位の外国人へ

【資料1】 ヨーロッパの人種観

「黒人や黄色人の現地人は、それが利用できる程度の価値しかない、一度壊れたら捨てられる労働器具に

も劣る人間なのである。それを教育し、訓練し、改良し、人間にまで高めようとして何になろうか？その出自や肌の色が現地人を劣った民族の永遠の隷属を運命づけているのだろうか？…（あるところではそのような人種観がまだ通用している）」[A.Sarraut 1922, p.86]

【資料 2】日本の外務省がフランス植民地省へ送った意見書（1906 年）

「ますます自尊心を意識するようになっていくアジアの隣人たちの自覚と調和するよう、インドシナは規則を変えるべきである。極東で日本が占めている位置ゆえに、日本人をヨーロッパ扱いしなければならず、ゆえに彼らが迫害的とみなす措置は免除すべきである。」[松沼 2012, p.153]

【資料 3】日仏協約の付属宣言書（1907 年 6 月 10 日）

「日本官吏および臣民はフランス領インドシナにおいて、また仏領インドシナ出身者は日本帝国において最恵国待遇を受ける」[松沼 2012, p.155]

【資料 4】ハノイ市におけるヨーロッパ人および現地人の人口調査（1936 年）

(1) フランス人 Français	<ul style="list-style-type: none"> ・フランス籍・人(種) de race ・旧植民地出身者 ・嫡出混血児 ・帰化現地人 	(4) 特別身分の外国人 Étrangers de statut spécial	シヤム人																		
(2) ヨーロッパ人の地位にある外国人 Étrangers de statut européen	<table border="1"> <tbody> <tr> <td>アジア人</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・インド人 ・オセアニア人 ・日本人 ・フィリピン人 </td> </tr> <tr> <td>アメリカ国籍</td> <td></td> </tr> <tr> <td>アフリカ国籍</td> <td></td> </tr> <tr> <td>その他のヨーロッパ国籍</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	アジア人	<ul style="list-style-type: none"> ・インド人 ・オセアニア人 ・日本人 ・フィリピン人 	アメリカ国籍		アフリカ国籍		その他のヨーロッパ国籍		(5) フランス臣民およびフランス保護国民 Indigène sujets ou protégés français	<table border="1"> <tbody> <tr> <td>安南人</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・安南人 ・明郷 ・コーチシナ人 ・ヌン族 ・マンシン族 ・ガイ族 </td> </tr> <tr> <td>タイ族</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・白タイ族 ・黒タイ族 </td> </tr> <tr> <td>その他のタイ族</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・マン族 ・ムオン族 ・メオ族 ・ロロ族 </td> </tr> <tr> <td>ラオス人</td> <td></td> </tr> <tr> <td>カンボジア人</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	安南人	<ul style="list-style-type: none"> ・安南人 ・明郷 ・コーチシナ人 ・ヌン族 ・マンシン族 ・ガイ族 	タイ族	<ul style="list-style-type: none"> ・白タイ族 ・黒タイ族 	その他のタイ族	<ul style="list-style-type: none"> ・マン族 ・ムオン族 ・メオ族 ・ロロ族 	ラオス人		カンボジア人	
アジア人	<ul style="list-style-type: none"> ・インド人 ・オセアニア人 ・日本人 ・フィリピン人 																				
アメリカ国籍																					
アフリカ国籍																					
その他のヨーロッパ国籍																					
安南人	<ul style="list-style-type: none"> ・安南人 ・明郷 ・コーチシナ人 ・ヌン族 ・マンシン族 ・ガイ族 																				
タイ族	<ul style="list-style-type: none"> ・白タイ族 ・黒タイ族 																				
その他のタイ族	<ul style="list-style-type: none"> ・マン族 ・ムオン族 ・メオ族 ・ロロ族 																				
ラオス人																					
カンボジア人																					
(3) 特権的身分の外国人 Étrangers bénéficiant d'un statut privilégié	中国人 chinois																				

[出典：ハノイ国家第一文書館：ハノイ市資料群 D.88.3278.より作成]

2. 国際的地位をめぐる駆け引き

- 日本帝国海軍の世界進出
- 皇太子裕仁親王欧州諸国訪問（1921 年 3 月 3 日～9 月 3 日）

【資料 5】 *Petit Journal*, 30/08/1914

「これほどよく訓練され、規律正しく、勇敢で強い、英雄的な日本軍は、どれほどの支援をわれわれにもたらすであろう。」[松沼 2017, p.36]

【資料 6】『国民新聞』1914 年 11 月 7 日

「ヨーロッパ人の日本出兵を談ずる者は、英国をして印度兵を派遣せしむるが如き語気を以てこれを説くに似たり。」「我は独立自主の大帝国にして、他人の指揮を受けるものにあらず。」[松沼 2017, p.39]

【資料 7】仏国大統領ノ歓迎ニ対スル皇太子殿下ノ御答辞報告ノ件（第 835 号 1921 年 6 月 3 日接受）

「六月一日…（中略）エリゼー宮ニ大統領ヲ御訪問アラセラレ大統領ニ親シク御面接ノ上…（中略）引続キ大統領及ビ大統領夫人主催ノ午餐ニ臨マセラル（午餐ニハ当日ノ随員一同内閣議長及ビ諸大臣下院議長、Goffre(Joffre), Foch, Pétain, Fayolle, 四元帥駐日仏国大使 Claudel 等列席セリ）席上大統領ハ熱誠ナル歓迎ノ辞ヲ述ベ日仏間ノ揺ギナキ友情ニ言及シタルニ對シ殿下ノ御答辞アリ…」

[外務省日本外交文書デジタルコレクション]

【資料 8】仏国大統領ノ歓迎ニ対スル皇太子殿下ノ御答辞報告ノ件（第 836 号別電 1921 年 6 月 3 日接受）

「大統領閣下 余ガ仏蘭西ニ來遊スルニ関シ…（中略）未曾有ノ大戦争中日仏兩國ハ協同目的ノ為メ正義及自由ノ理想ノ下ニ相提携シ以テ其ノ国交益々親密トナルヲ見タルガ日本国民ガ仏蘭西国民ニ對シテ抱ケル尊敬口賞ノ念ハ仏蘭西将卒ノ武烈犠牲ノ精神ノ發揮セラルルヲ見テ一層強メラレタリ 幸ニシテ余ハ本日仏国並ニ文化ノ華トシテ字内ニ知ラレタル巴里ノ都ヲ訪問スルヲ得タリ…」

[外務省日本外交文書デジタルコレクション]

【資料 9】裕仁親王と Foch 元帥？ 1921 年 6 月 14 日



Bettman Archives, Getty Images©

3. 1920年代フランスの日本帝国観 ～ポール・クローデルの書簡より～

- Paul Claudel (1868-1955): フランス外務省入省(1890)、アメリカ合衆国副領事(1893-95)、中国副領事・領事(1895-1909)、フランクフルトおよびハンブルク総領事(1911-14)、イタリア経済任務担当官(1915-16)、ブラジル全権公使兼特使(1917-18)、デンマーク全権大使(1919-21)を経て、駐日フランス大使(1921-27)
- 渋沢栄一と東京恵比寿に日仏会館設立(1924): 初代館長の東洋・インド学者シルヴァン・レヴィ Sylvain Lévi は 1935年設立のパリ大学日本学研究所理事に(但し同年に逝去)
- 日本: 孤独な帝国、屈辱の帝国

【資料 10】日本の評判について(1921年11月28日)

「私は、日本への航海の途上立ち寄った中国と仏領インドシナの各地で、あらゆる国籍のヨーロッパ人が、日本について、そして日本が近隣諸国に対してとりつけている強引な政策について、強い警戒心を表明するのを耳にしました。彼らは、中国の無政府状態や風俗壊乱はあらかじめ日本のせいだと言いました。」

[クローデル 1999, p.23]

【資料 11】日仏接近について(1922年2月8日) 下線は報告者による

「ジョッフル元帥の訪日を機に、わが国に好意的なことで知られる『読売新聞』が、フランスと日本の関係接近について書きました。…(中略)アメリカとの関係はワシントン会議後好転しています。とはいえ、以前はおおびらに脅しあっている状態だったのが、双方とも不安なそして疑い深い警戒心が変わったところなんです。イギリスとの同盟は終わりました(日英同盟 1902-23)。今後は極東においてアングロサクソンの両国がたがいの利益から連帯するのが、既定の事実と見なされる可能性があります。日本は孤立を恐れています。ですから、日本はフランスとの友好関係に期待することができれば幸いに思うでしょう。ジョッフル元帥がきわだって丁重に歓迎されたのは、こうした理由からであることは間違いありません。」

「日本が示していると思われるこの好意を、わが国にとってはより重要な国々への友情に悪影響を及ぼすことなしに、どの程度受け入れたらよいかを判断するのは私たちの仕事です。ヨーロッパ再建に関係のあるすべての問題において、日本はヴェルサイユ条約後、重要な発言権を有しています。…(中略)わが国としては日本と衝突する理由はまったくありません。中国北部に関する問題については、…(中略)日本と友好関係を保てば、わがフランスの影響力はいつそう有意義に行使されると思います。…(中略)もしかしたら満鉄の問題でフランスの利益が保証されるかもしれません。仏領インドシナに関しては、目下のところ、日本は朝鮮と台湾からこのさき米を得ることができるのですから、激しい嫌悪感を引き起こしてまでも、わが仏領のメコン・デルタ地帯の米に関心をもとうという気を起こすことはあるまいと、私は確信しています。日本が望むのは、わがフランスの植民地の関税制度が日本に都合よく改善されるということだけでしょう。…(中略)なにはともあれ、私たちは現実の日仏接近を歓迎すべきだと私は思います。現在極東を支配している国の友情は考慮に値する事柄なのです。」 [クローデル 1999, pp.57-58]

【資料 12】第二次世界大戦前夜のフランスの対日本帝国観（1937年）

「日本人は近代的なるものすべてと、西洋的なるものすべてに大いに心酔している。しかしこの心酔は、西洋に対する崇拜を相伴っていない。彼らには、西洋の力は個人の優越性よりも、秘密を知り文書を獲得することから生まれると考える傾向がかなりある。彼らは、どんなに近代的なものが好きでも、基本的に西洋人より個人的に非常に優れており、西洋は何らかの形で自分たちを辱めたと確信してきた。人は恩を受けた人に対しては、決して同情しないものであることを認めざるを得ない。日本人は、欧米から借りたものそのものに屈辱を感じているのかもしれない。社会的にも、政治的にも屈辱を感じている。彼らは、西欧列強が、様々な外交交渉で自分たちを辱めたのだと繰り返し述べてきた。…（中略）したがって、日出ずる帝国に西洋への敵意の感情が呼び起こされるのは容易なことなのである。…（中略）日本の外交政策はまだ交差点にある。日本の最良の友人は、日出ずる帝国が自らと他の者たちを破滅へと導く道に入り込ませないことを願っている。」

（E.Dennery「日本の外交政策」『外国・外交・植民地問題研究』1937／ANOM, Guernut 33）

※ 仏印ルート禁絶（仏印経由での中国向け武器輸送の禁止）に関する日仏交渉は1937年9月開始。

<小課題>

18-21世紀の「帝国 empires」に多様性があるとすれば、各帝国の特徴をどのように（何に注目して）捉えればよいか。帝国を一つ取り上げて（または帝国間の比較から）記述せよ。

【主要参考文献】

P.クローデル（奈良道子訳）『孤独な帝国 日本の1920年代：ポール・クローデル外交書簡1921—27』草思社、1999年。

岡田友和「フランス植民地帝国における現地人官吏制度—インドシナを事例に」『史学雑誌』第119編 第6号、史学会、2010年。

—「(第五章) 日仏関係から見る世界史(1858年—1945年)—世界市場と国際的地位をめぐる—」秋田茂・桃木至朗(編著)『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育—日本史と世界史のあいだで—』大阪大学出版会、2020年。

権上康男「フランス資本主義と日本開港」石井寛治・関口尚志編『世界市場と幕末開港』東京大学出版会、1982年。

—『フランス帝国主義とアジア インドシナ銀行史研究』東京大学出版会、1985年。

篠永宣孝「駐日大使クローデルとフランスの極東政策」『早稲田政治経済学誌』No.368, 2007年7月, 2-2。

—『フランス帝国主義と中国—第一次世界大戦前の中国におけるフランスの外交・金融・商業』春風社、2008年。

芝原拓自『日本近代化の世界史的位置—その方法論的研究』岩波書店、1981年。

立川京一『第二次世界大戦とフランス領インドシナ—「日仏協力の研究」』彩流社、2000年。

寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』思文閣出版、2017年。

- 松沼美穂『植民地の＜フランス人＞ 第三共和政期の国籍・市民権・参政権』法政大学出版会、2012年。
- 「第一次世界大戦初期における日本陸軍の欧州派兵問題—フランス外交の視点から—」『思想』No.1121, 2017.9.
- 南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵（編）『新しく学ぶ西洋の歴史』ミネルヴァ書房、2016年（第6章—2「開国 日本とフランス」および第7章—2「共和政フランスの内と外」）。
- 宮下雄一郎「フランスと東アジア 1945—1951年—「第二次世界大戦の論理」と「冷戦の論理」のはざままで—」細谷雄一（編）『戦後アジア・ヨーロッパ関係史』慶應義塾大学出版会、2015年。
- アン・ローラ・ストーラー（永渕・他訳）『肉体の知識と帝国の権力—人種と植民地支配における親密なるもの』以文社、2010年。
- グザヴィエ・ヤコノ（平野千果子訳）『フランス植民地帝国の歴史』白水社、1998年。
- リチャード・シムズ（著）・矢田部厚彦（訳）『幕末明治日仏関係史』ミネルヴァ書房、2010年。
- 和田桂子・他（編）『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』ゆまに書房、2012年。
- 満鉄東亜経済調査局『仏蘭西植民地法提要』、1937年（Louis Rolland et Pierre Lampuré, *Précis de législation coloniale*, 2^e éd, 1936の邦訳）。
- 『南洋叢書第二巻 佛領印度志那篇』、1941年。
- Joyeux, B., *Le péril vénérien et la prostitution à Hanoi*, Imprimerie d'Extrême-Orient, Hanoi, 1931.
- Tracol-Huynh, Isabelle, “La prostitution au Tonkin colonial, entre races et genres” . Genre, sexualité & société [en ligne], 2009.
- Namba Chizuru, *Français et Japonais en Indochine (1940-1945). Colonisation, propagande et rivalité culturelle*, Karthala, Paris, 2012.
- Albert Sarraut, *La mise en valeur des colonies françaises*, Payot, Paris, 1923.
- , *Grandeur et servitude coloniale*, Éditions du Sagittaire, Paris, 1931.
- Pierre Singaravélou, *L'école française d'Extrême-Orient ou l'Institution des marges (1898-1956)*, L'Harmattan, Paris, 1999.
- , *Professer l'empire. Les « sciences coloniales » en France sous la III^e République*, Publications de la Sorbonne, 2011.